

アニメ『この世界の片隅に』の功罪—— 新しいアメリカ平和文学研究者の立場から

広島大学大学院文学研究科 新田 玲子

1. 『この世界の片隅に』が 伝えたもの

2016年11月から公開されている、この史代原作、片渕須直監督脚本のアニメ『この世界の片隅に』は、原爆が投下される前年の

1944年に、広島市内の江波地区から、日本有数の軍港があった呉の北條家へ、18歳で嫁いだ女主人公すずの日常生活を描いたものである。戦況が次第に悪化し、兄は戦死し、物資が次々と無くなつてゆくなかで、すずは様々な工夫を凝らして日々を明るく心豊かに暮らそうと努める。しかし呉の空襲は激しさを増し、すずはかわいがっていた姪の晴美と自分の右手を喪失する。正し

とき、すずは晴美の身代わりのように慕ってくる原爆孤児と出会い、彼女と共に再び生きてゆこうとする。

「昭和二十年、広島・呉。わたしはここで生きている」というサブタイトルは、そんなすずの懸命な生き方を表している。

封切り当初は、同年8月に封切られたアニメ『君の名は。』が全国で大ヒット中だったのに対し、公開館数がたった63館と限られた、実にささやかな公開という印象だった。それにもかかわらず、第1週の週末動員数で堂々10位にランキングし、4週目の12月3日、4日には4位につけて、全国的な注目を集めるようになった。興行成績では『君の名は。』に遠く及ばないものの、2017年8月4日、『朝日新聞』の山野健太郎氏の報告に、「映画館のない地域でも上映する動きが広がっている。配給元の東京テアトルによると、12

月までに25都道府県のホールや公民館など340以上の会場で上映会が予定され……観客動員200万人を越す大ヒットになり、ロングラン上映が続いている」とあるように、通常の観客層を越えた広まりを見せている。また、映画.com発表のツイッターつぶやきランキングでは、公開2週目で、それまで二位だった『君の名は。』を上回って首位に立っている。

作品が高い評価を受けていることは、第40回日本アカデミー賞最優秀アニメーション作品賞、第90回キネマ旬報ベストテン日本映画第1位、第71回毎日映画コンクール日本映画優秀賞・大藤信郎賞、第41回アヌシー国際アニメーション映画祭長編部門審査員賞など、次々と大きな賞を獲得したことに裏付けられる。しかも、現在作品公開は、アメリカ、メキシコ、アルゼンチン、チリ、タイ、香港、英国、ドイツ、フランスなど、海外にも広がっており、その評価も概ね肯定的である。たとえば2017年8月10日の『ニューヨークタイムズ』のテオバーギー氏の記事では、アニメの冒頭で1930年代の広島の通り

が描かれれば、その後何が起きるか予測されるが、「新作アニメ『この世界の片隅に』は茶と緑のパレットを思わせる柔らかい色調で、第二次世界大戦中に大人になる若妻すずの、いつも赤面し続ける姿のようにロマンチックで、すずの忍耐力は戦後日本の希望を体現するようになる」と、戦争体験を題材にしながらも日本的な素晴らしき資質が表されている点を高く評価している。

実際、『この世界の片隅に』が通常のアニメ映画の枠を越えた観客を引き込み、多くのつぶやきをもたらしているのは、軍港都市呉が被った激しい空襲や広島原爆という、第二次世界大戦の中でも特に重苦しい出来事を背景にしているためだけではない。作品の冒頭、「うちはようばうつとした子じゃあ、言われとて」と自身を語るすずの視線から、戦時下の重苦しさにも負けず、日々の暮らしに小さな喜びや楽しさを見出して生きる人々の姿が、作品に和やかな救いをもたらしているからである。この作風の新しさは、日本の戦争アニメの代表作で、野坂昭如原作による1967年の同名の短編小



説をもとに、1988年、高畑勲監督・脚本でアニメ化された『火垂るの墓』と比較すれば「目瞭然である。

『火垂るの墓』は、公開当初、高畑がまだ無名で、題材も地味だったこともあり、配給会社による大きな宣伝はなかった。しかし、『キネマ旬報』で日本映画ベストテンの6位に入り、ブルーリボン賞や文化庁優秀映画、国際児童青少年映画センター賞、シカゴ国際児童映画祭最優秀アニメーション映画賞、第1回モスクワ児童青少年映画祭グランプリなど、数々の賞を獲得して話題を呼んだ。また、当時の神戸の街並みを忠実に再現し、細部までリアリズムに拘った点でも、『この世界の片隅に』に酷似している。その一方で、1945年6月5日の神戸大空襲によって自宅

と母親を亡くし、父親も戦死し、孤立した14歳の兄と4歳の妹が、食料を手に入れられず栄養失調で亡くなってゆく姿は、観る者の胸を塞ぐ辛く悲しいもので、妹を思いやる兄の優しさが切ないまでに美しく描かれてはいても、笑いとは無縁の作品である。

一方、『この世界の片隅に』は戦時下の広島と呉の姿を忠実に再現した点で『火垂るの墓』に勝るとも劣らないものの、2017年8月7日の『朝日新聞』掲載の対談で、片測が、『『普通の生活』をかみしめて描いた』と語っているように、片測が拘ったリアリズムは観客の心に寄り添い、親近感を抱かせるようなものである。

片測は2010年にこの漫画をアニメーション化しようと企画した時点から、当時の日常を忠実に再現しようと深夜バスで何度も広島に通い、当時の写真や情報を集めた。その結果、アニメでは当時の広島と呉の街並み、闇市の様子はもとより、戦時下の物価や配給品、乏しくなる食料で工夫された食事のレシピ、もんべの仕立て方など、日常生活の

細々とした事柄が具体的に描き出されている。また広島と呉の方言も使い分けられ、さすがにとつての呉は実家を遠く離れた異郷だったことも示唆されているし、原作にはなかった男性的視点を加えて、当時呉に入港していた航空母艦や艦船なども正確に描かれている。

このような細部に至る正確な描写により、『この世界の片隅に』における戦時下の広島と呉の日常生活は非常に身近なものに感じられる。それ故に、穏やかだったはずの日常が失われてゆくとき、観客はその辛さを共有し、戦争は二度と繰り返してはならないものだという思いを自然に強めてゆく。同様に、現在は緑の樹木と記念碑しかない平和公園一帯にあった「中島本町」の賑わいも、観客に懐かしさを感じさせる一方、無言のうちに、原爆がどれほど多くの人々の平穏な生活を奪い去ったか訴える。

従って、『この世界の片隅に』は重要な反戦メッセージを確実に伝えているのだが、その伝え方は、のんびりしたはずの人柄を通して眺められた、時に笑いを誘う日常のリアリ

ティを極めるという間接的なものである。その結果、この作品は単なる反戦作品を越え、より普遍的な作品に仕上がっている。ポップカルチャーサイト『デン・オブ・ギーク』のライターランビー氏が、2017年6月28日の記事において、『この世界の片隅に』は『火垂るの墓』のように戦争の苛酷さを赤裸々に描いてはいないものの、胸にしみる悲しみややるせないさから、『火垂るの墓』に劣らない反戦メッセージを伝えているとしたうえで、『この世界の片隅に』は、日本文化とはまったく縁のない我々外国人にも、苦しみ、喪失、柔軟な精神力を、しとやかに語りかける物語になっている』と評価するのも、作品が前面に押し出した主題が、戦時下を生き抜くはずの、現代の日本人にも通じる尊い生き様であったからに他ならない。

2. 『この世界の片隅に』が伝えられなかったもの

『この世界の片隅に』がすすずの生き様に焦点を当て、反戦メッセージをあくまで言外に留められている点は、

作品の冒頭にも見て取れる。この作品がまず見せるのは、原爆投下以前の広島島の「中島本町」における年末の賑わいである。やがて画面が青い空に移るなか、コトリンゴがゆつたりと歌う主題歌、「悲しくてやりきれない」が流れ始める。

胸にしみる空のかがやき、今日も遠くながめ、涙を流す。

白い雲は流れ、流れて、今日も夢はもつれ、侘びしく揺れる。

悲しくて、悲しくて、とてもやりきれない、

この限りない虚しさの、救いはないだろうか。

「悲しくてやりきれない」思いがどこからくるのか、「中島本町」が原爆で失われたことを考えれば、想像に難くない。しかしアニメはそれに触れることなく、青空の片隅に黄色いたんぽぽを提示する。作中、すずは呉の白いたんぽぽの中に黄色いたんぽぽを見つけ、広島から呉にひとり嫁いできた自分の姿に重ねる。従ってこの黄色いたんぽぽは、戦時下を健気に生き抜いたすずの懸命に生きる姿を偲ばせ、「限りない虚しさ」に「救い」をもたらす、このすずの姿こ

そが、この作品の最も主要な主題であることを示唆している。

このように『この世界の片隅に』では、戦争に対する思いや反戦メッセージはあくまで間接的にしか伝えられない。だがたとえそうであったとしても、細部にまで拘った原爆以前の街並みや当時の日常生活の詳細とは対照的に、戦争や原爆の描き方はあまりに曖昧で、リアリティに欠けると言わざるをえない。

たとえば、このアニメには被爆者の焼けただれた実像はまったく出てこない。広島から呉に避難してきた被爆者は多数いたはずだが、ひとりの被爆者が座っていた跡を示す黒い影を前に、近所の婦人たちが、「座ったまま亡くなりんさったかね。広島からここまで歩いて来てえ、どこの誰かもわかりやせん。顔も服もべろべろでえ。北條の嫁さんには黙つとこおで。あの子の顔をよお見れんよお。気の毒でえ」と会話し、すずの実家も悲惨なことになっているに違いないと示唆されるだけである。被爆者の凄惨な姿を提示しなかったのは、すずが被弾で左手を失う場面を心象で表現したのと同様、残酷なシーンを回

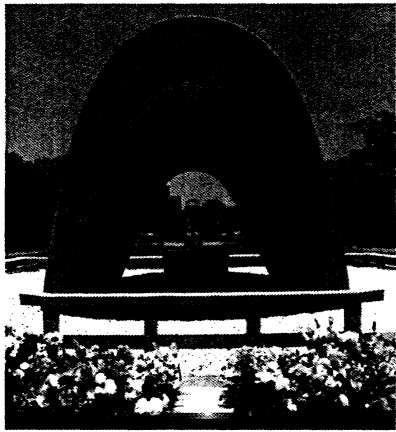
避する意図によるものだったかもしれない。しかしすずが被った事態は前後からある程度想像できても、熱線や放射能による被害は通常兵器がもたらす被害とは異質で、原爆について何も知らない者には想像が及ばないに違いない。

同様の不満は、大きなきこの雲や、爆風で飛んできた障子の棧の描写にも感じられる。なぜなら、それらは爆弾の大きさを示唆できても、それらが放射能を帯びていたことや、その放射能にどれほど多くの人が後々まで苦しむことになったかを、知らしめることはできないからである。

情報の故意の欠落は、すずが実家を見舞う場面でも、両親の死亡が伝えられても、死に様が語られない場面にも窺える。しかも、病に伏せている妹のすみには目に見える原爆症の症状がなく、すみが被爆したことを伝えるために見せる、腕の内側の小さな紫のケロイドは、ありえない、起こりえない傷でさえある。もし腕の内側にケロイドが残るなら、最低でも腕のその側は広範囲に焼けただれていなければおかしい。しかも熱線を浴びるのは、普通なら腕の内

側でなく外側だろうし、首や顔、あるいは頭部にもやけどの傷が残るようなものである。

さらに当惑させられるのは、すずと夫の周作が爆心地で孤児になった少女を拾い、家へと連れ帰る最終場面である。少女は最初、爆風でガラスが突き刺さった母親と共に焼け野が原を歩いている。母親の体には楔形に割れたガラスが何本も突き刺さっている。だがそこまで爆風を受けたのであれば、熱線にも晒され焼けただれた皮膚が垂れ下がり、むき出しの肉に血が滲んだむごたらしい姿になっているのが普通だろうに、傷ついた母親の姿はあまりに綺麗すぎる。一方少女は、乞食のように薄汚れているだけでまったく外傷がない。もし母親に庇われて無傷であったとしても、すずが少女に出会う爆心地から二キロ内では、屋内にいて直接の傷を免れた人も、その日のうちに脱毛、高熱、嘔吐と、原爆症の症状が出て、大半は短期間に死亡している。従って少女が原爆症の症状をまったく呈していないのは現実にくぐわれないし、爆心地へはすぐさま救援隊が入っているの、少女がそこで



何ヶ月もひとりで彷徨っていたこと
 自体、違和感が拭えない。

こうした不自然な描写に加え、す
 ずとすずの夫、周作が、何のためらい
 もなく少女を家に連れ帰り、一家は
 しらみという、当時どこにでもあつた
 身近な騒ぎに、笑いながら少女を受
 け入れてゆくエンディングもまた、ひ
 どくセンチメンタルに見える。なぜな
 ら、当時の人々は被爆者の傷のおど
 ろおどろしさだけでなく、何の外傷
 もない被爆者がばたばたと死んでゆ
 く様に怯えおののき、市内から逃れ
 てきた被爆者に雨戸を閉ざし、援
 助を拒否した例も少なくなつたの
 に、このエンディングは被爆者が被つ
 たそうした差別的扱いをまったく
 無視しているからである。

確かに、現在改装が進行中の原
 爆資料館でも、被爆者の、やけどで

剥がれた皮膚が顔や腕から垂れ下
 がり、炎を背に瓦礫の中を逃げ惑
 う姿を模したマネキン人形の展示
 は撤去されている。また原爆漫画と

して有名な中沢啓治の『はだしのゲ
 ン』に描かれる被爆者の無残な実態
 や、彼らが受けた不当な差別は、胸
 が痛むと敬遠されることも多いし、
 昭和天皇の責任や、原爆を使用した
 アメリカ軍やアメリカ合衆国などの
 責任を、齒に衣を着せずに追求する
 中沢の姿勢も、被爆者を戦争被害
 者としてしか捉えていないと、海外
 では手厳しく批判されることもあ
 る。従つて原爆の扱いが難しいこと
 は確かだが、その点を考慮してもなお
 『この世界の片隅に』における原爆
 の描写は甘すぎると言わざるをえ
 ない。そして、呉の空爆で失われた
 晴美と原爆孤児を無造作に重ねる
 ような、原爆が呉に日々落とされた
 通常爆弾を大きくしただけのもの
 のように錯覚させる描写は、やはり
 容認しがたい。

描写の不備に歯痒さを覚えるの
 は、原爆の実像が歪められていると
 感じられる点についてだけではない。
 すずは広島という地方都市の生ま

れで、ようやく大人になりかけたば
 かりの年齢で見合い結婚をし、呉の
 片田舎の家庭に納まった世間知らず
 の娘に設定されており、このアニメは

そうしたすずのうぶな視点から見
 た日常に焦点を当てているため、戦
 争の実態はどういうものだったのか、
 日本はなぜ戦争をしているのか、す
 ずはそれにどう関わっているのか、本
 当に戦争は避けられなかったのかと
 いった、戦争に直接関わる議論や考
 察や反省がまったくといってよいほど
 無い。しかも、終戦を告げる玉音放
 送を聞いた直後のシーンでもたらさ
 れる、すずの戦争に関する唯一のコメ
 ントは、この作品が暗に伝えようと
 している反戦メッセージとはひどく
 矛盾して見える。

この時、近所の人たちは、新型爆
 弾が落とされたし、ソビエトが参戦
 したので、降伏はやむをえないと領
 き合う。これに対してすずは、「そう
 いうことは覚悟の上じゃあないかね
 最後の一人まで戦うんじゃないかっ
 たんかね。今ここにまだ五人おるの
 に、まだ左手や両足も残つとるのに
 ……」と、敗戦に対する悔しさを滲
 ませ、激しく抵抗する。そして、「飛

び去つてゆく。うちのこれまでもが。
 それでいいと思つてきたものが。だか
 ら我慢しようと思つてきた、その理
 由が。ああ……海の向こうから来
 たお米、大豆……そんなものででき
 とるんじゃないあ……うちは。じゃけ
 え暴力に屈せなやあならんのかね。
 ああ、何も考えん、ほうつとしたまま
 のうちでいたかつたなあ」と嘆き悲
 しむのである。

敗戦に慟哭するすずの姿によつて、
 すずを国家が為した嘘の無垢な犠
 牲者のように見せたかつたのだろう
 か。もしそうなら、それはあまりに
 安易で感傷的な判断だつたらう。と
 いうのも、日本の戦争理由を「お米
 と大豆」という身近な食料問題に帰
 したとき、すずの嘆きは本質的にひ
 どく危険なものになつているからで
 ある。すずは、飢えを切り切るため
 に暴力に頼つた貧しい国が、より強
 大な国の暴力に屈したと見なす。そ
 れは、生存のためであれば力による
 他国侵略はやむをえなかつたとも、
 より大きな軍事力を持つべきといれ
 ば悲劇は避けられたのにと、受け
 取れる言葉である。

エンターテインメントの業界サイ

ト「ザ・ラップ」のダン・コーラハン氏が、「『この世界の片隅に』は第二次世界大戦を直接扱おうとするたびに、むしろ薄っぺらいものになってしまふ」と失望を禁じえないのも、「ニューヨークタイムズ紙」のトウ・パージー氏が2017年8月10日の記事で、「爆弾が落とされ、都市が焼けているのに、なぜ兵に海軍が必要なのか、どうして戦争の遂行を支えなければならぬのか、すずは一度として思いを巡らせることがない」と批判するのも、作品が戦時下の日常を克明に描きながらも、反戦メッセー

があくまで間接的な示唆に留まり、すずのうぶで感傷的な態度がともすれば戦争の現実から目を背けさせ、時には戦争肯定と誹られかねない行動を引き起こしているからに違いない。

3. 新しいアメリカ平和文学 研究者の立場から

戦争を直視し、それとどう取り組むかという点で、『この世界の片隅に』には不備が目立つが、それでも第二次世界大戦から遠ざかるなか、戦

争を知らない若い世代に戦争に関心を持つてもらおう方法として、このアニメがひとつの新たな可能性を提示したことは確かだろう。もともとアメリカ文学では、こうした戦後の平和な世代を視野に入れた工夫は、すでに1960年代から試みられてきた。

たとえば、ジョゼフ・ヘラーが自身の第二次世界大戦における空軍体験をもとに書き上げた『キャッチ22』(1961年)は、主人公ヨッサリアンを取り巻く途方もない状況と大仰な笑いで読者を楽しませ、さらにはフラッシュバックという心理的時間操作を用いて衝撃を緩和しながら、戦争の無意味さや非情さを伝える反戦作品になっている。同様に、カート・ヴォネガットの『スローターハウス5』(1969年)は、ドイツ系アメリカ人として第二次世界大戦に従軍し、ドイツ軍の捕虜となり、ドレスデンで味方連合軍の空襲によつて命の危険にさらされた作家の実体験をもとにした作品で、時間旅行や宇宙人によるアブダクションストーリーなどのSF的手法で読者を楽しませながら、主人公ビリー・ピ

ルグリム(巡礼者)によるドレスデン空襲への心の巡礼を描く。

これらの作品は若い世代の関心を巧みに惹きつける新しい形の戦争文学としていち早く注目されたが、ヘラーやヴォネガットは作者の戦争体験を直接題材にしない作品でも、反戦の主題や、平和を守り継ぐために必要なリベラルなヒューマニズムを前面に打ち出している。従ってこれらの「新しい平和文学」もまた、戦争と深く関わっているにもかかわらず、筆者が試みるまでは戦争との関わりで論じられることはほとんどなかった。

たとえばヘラーの『神のみぞ知る』(1984年)は老いたダビデ王の回想の形をとっているため、ヘラーのユダヤ性や聖書との関わりに関心が集まりがちで、「戦いの王」としてのダビデの好戦的姿勢や、「平和の王」としてのあからさまな欠点に、ヘラーの戦争体験に基づく平和へのメッセージが読み解かれることはなかった。同様に、ヴォネガットの『猫のゆりかご』(1963年)では、原爆が広島に投下された日、原爆の父と呼ばれる科学者がいかに過ごしたか記録

しようとした語り手が、この科学者によるもうひとつの発明品、アイス・ナインによる世界の終末を目撃するが、世界の終焉を扱ったSFの設定や、科学の対極として登場するポコン教のシニカルな笑いに注意が向きがちで、原爆との関わりを視野に、新しい平和文学としての機能に考察が及んだことはほとんどない。

議論が表面的な題材だけに留まる傾向は、J.D.サリンジャーの作品では特に著しい。本に収録されたサリンジャー作品は、その大半が、戦後アメリカの物質主義的豊かさを背景にしているため、彼の作品はアメリカの物質主義との関係で論じられることがほとんどで、そうした題材を通してサリンジャーが訴えかけるものが、戦争を繰り返さないためのメッセーであることを、大抵の読者は意識しない。

しかし彼が戦争を強く意識していたことは、1945年8月4日の『サタデー・レビュー』の文芸批評への投稿記事で、「戦争作家は自分がなりたいと思う唯一の種類の作家だ」と断言していることから明らかである。もっとも、この時彼は、「戦

争は自分が戦争作家になったこととはほとんど関係がない」と、自身と戦争との関係を強く否定している。しかしこれは、若い作家には戦争が非常に貴重な体験になると述べたアーヴィン・ショーの、戦争賛美になりかねない意見に異を唱えたからで、実際のところ、口当たりの良い風俗作品でしかなかったサリンジャーの初期作品は、実戦体験を経て大きく変化し、他者の痛みへの共感や心と心のふれ合いといった、二度と戦争を繰り返さないために培われるべき内面を見つめる、深みのある作品に変化している。

もともとサリンジャーは、「最後の賜暇の最後の日」(1944年)でベープ(赤ちゃん坊や)と呼ばれる若い主人公に、「この戦争で戦った者や、これから戦う者は皆、ひとたび戦争が終わったなら口を閉じ、決してどんな形でもそれを口にしないことが、道徳的義務だ」と言わせるように、戦争を語り継ぐこと自体が戦争を特別視させ、新たな戦争を引き起こす原因になると危惧していた。それ故、彼自身も戦後、いちはやく戦争という題材から離れ、「黄金の50

年代」と呼ばれる好景気を先取りした、アメリカ中流社会の日常を扱うようになる。しかしそこで主人公が抱える様々な内面の問題は、サリンジャーの戦争体験以後顕著になる、平和に関わる思いを強く反映している。

戦争への直接言及をためらったサリンジャーとしては、彼が敢えて日常を舞台に描いた作品の平和へのメッセージが、戦争と結びつけて論じられ直すことは意に反するかもしれない。しかし『この世界の片隅に』が間接的に反戦メッセージを伝えるにもかかわらず、敗戦を告げる玉音放送に憤怒するすずのセンチメンタリズムがそれをたやすく覆すように、漫然と反戦の気持ちを抱いているだけでは、身の危険に晒されたり、自身の利害が絡んだりしたときには、役に立たないことも多い。このことは先のアメリカ大統領選挙で、白人労働者階級の仕事を移民が奪っているとして、過激な反移民政策を打ち出したトランプ氏が、職を失った多くの白人有権者を取り込んで勝利に結びつけたことでも実証されている。移民国家アメリカの自由と平

等の理念からすれば、あつてはならない選択だったが、窮すれば、大半の人は理想や建前よりも本音を優先してしまふものである。

筆者が長年にわたり、第二次世界大戦の影響を受けたアメリカ作家による作品を新しい平和文学という観点から分析し、二度と戦争を繰り返さないために作家たちが考察し、提案してきたことを、日々の行動や生き方と結びつけて説明し続けてきたのは、平和や反戦を漠然とした理念としてではなく、具体的な日常場面における日々の行動と結びつけて理解し、実践していなければ、いざという時に机上の空論で終わってしまふと懸念するからに他ならない。

今回『この世界の片隅に』を取り上げ、それが描き出していない戦争や原爆の実情を指摘したり、すずが問いかけていない様々な重要な問題があることに言及したりしたのも、これらの不足でもってこのアニメを批判することが目的ではない。この作品はそうした不足があってもなお、戦時下という厳しい状況を少しでも明るく過ごそうと努力した少

女の健気さ、逞しさを見事に描き出し、大きな感動をもたらした点で高く評価されるだろう。また、戦争を知らない世代が、それまで関心を寄せたこともない戦時下の生活について、そして当時の広島や呉について、考えるきっかけとなったり、戦争は繰り返してはならないという気持ちを強めたりしたことも、確かだろう。

ただ、その平和への一歩をより確かな平和への道筋に変えてゆくためにも、この作品で描ききれていない戦争の現実があることを理解してもらいたかった。漠然とすず共感し、涙しつつ、何となく戦争を疎ましく感じていただけでは平和は守れない。日本の上空をミサイルが飛び、領海が侵犯され、政治的にも経済的にも一方的な攻撃を受けているように見える場面が増えつつある今だからこそ、『この世界の片隅に』をきっかけに、そうした危機的状況を楯に国力増強を図ることが正しい選択かどうか、日本ファーストで物事を解決しようとするのが正しく、姿勢かどうか、しっかりと判断し、自らの足で平和を守る道を踏み固めていってほしいと、強く願うのである。